

英詩に見る子供の姿(七)

松原至大

前號までに拙譯をお目につけたのは、大體古典に屬する作品と見てよいであらう。その後のもの、及び現代のものは、申し上げるまでもなく、私たちには紹介する自由が、今日のところでは許されていない。

しかしながら、その香にさえ觸れないで、この稿を終るとは、いかにも心もとないで、現代に至るまでの子供を描いた代表的中間詩人として、彼の地においても高く評價されているウォルター・ジョーン・デ・ラ・メア氏の作に、許されている範圍で觸れてみたいと思う。

彼は千八百七十年に、イギリスのケント州に生れた。祖先はフランス新教徒の名家と傳えられている。石油會社の社員をつとめて、文筆を持っていたが、千九百一年に「子供時代の歌」と題する詩集を、ウォルター・レイマルのペンネームで發表してから、詩人としての生活が始まつたのである。デリケートな筆致、美しいリズム、それはいづれも彼が主なる題材として選んだ子供の世界を描くのに、いかにもふさわしいものである。この集は、少年の日の思い出を、四十四篇の

詩に、思いのままに話したもので、少年の姿を描いたというよりも、自然に呼びかけるその心情が豊かにうたわれている。

次いで千九百十二年に出版されたものに、「子供の一日」というのがある。私の手元にあるのは、その再版本で、千九百二十年に出たものである。それには一ページおきに、五位の少女の、朝起きるとから夜ベッドに入るまでのかすかすの姿をとつた寫眞がはさんである。おそらくこれは、彼がこの詩の中で呼びかけているエリザベス・アン——彼の愛兒の姿であらう。彼はその詩集の最初に、このように記している——

私はロザモンド・ローズに
歌をうたつてやつた。

だが知つているのは
うす明りの中の風ばかり。

私はジエネット・ジエニーに

歌をうたつてやつた。

彼女は窓から銀貨を投げた。

私はマティルダ・メイに

歌をうたつてやつた。

彼女は逃げ出してしまつた。

私はスーサメ・スーに

歌をうたつてやつた。

彼女は私の歌を笑いとぼした。

けれど私は、できるだけ楽しく

エリザベス・アンには

歌をうたつてやりたい。

あなた方がここに見る小さなアン、

幸福そのもののように笑つてるアン。

そして私の歌が言いたいことは、

彼女が永い永い一日にしたことと同じ。

ひとりぼっちではかり遊んでいて。

それでも少しも寂しさを感じないのだ。

これで輝かしい子供の一日の生活が始まる。食事のこと、勉強のこと、遊びのこと、入浴のこと、身じまいのこと、そして幸福にあふれた一日が、夜のとばりと共に閉ぢられる

と、彼はまたアンのために、次ぎのようにうたつてゐる。

この短い日はもう終つた。

人生は東の間だ。

私の胸の痛みを知らせておくれ、

私の胸の苦しさを知らせておくれ、

エリザベス・アンに

別れを告げるこの思いを、

この悲しい調べをおうたひ、

音のないこの糸の調べを。

悲しみというものが始まつてから、

この世にさよならが言われたのだ。

だから、私も言わなければならぬ。

東の間の一日の子供よ、

エリザベス・アンよ。

これだけの紹介では、「子供の一日」の全巻が、さびしさのみ覆われているように思われる讀者も多いことと思うが、決して、そうではない。明るい詩の心は至るところに生動して、子供の幸福を追いつけている。しかしながら、この詩人はいたずらな甘美を追いかけているのではない。その奥にかくれた人生のほんとうの姿を、ありのままにうたおうと努力している。

アン、アン。

おいで、大急ぎでおいで。
お魚がものを言つていろよ。
フライ・パンの中で。

ガラスのように透きとおつた
ヘットのの中から、

お口を開いて、
「ああ」と、苦しんでいる。

ああ、なんと、苦しもうな

「ああ、ああ」

それから、しゆうしゆうの音にかわつて、
じつとしてしまつたよ。

これは、千九百十三年に發表された「ピーコック・バイ」
の中の一編である。今日のような世相の下でも、私たちは見
逃がすことのできないものである。

パンとさくらんぼ

「さくらんぼ、おいしーさくらんぼ。」

お婆さんが囁つている。

雪のように白いエプロンかけて、

バスケットをそばに置いて。

そこへ小さな男の子たちがよつて来た。

輝いた眼、赤い頬は、

パンといつしよに食べるのに、

かご入りのさくらんぼを買いに。

満 月

ある晩、ディックがうとうとしていると、
ねむい眼の中に、

大きい静かな光が忍びよつて来た。

沈黙の空から。

それはなつかしいお月さまの光、

ディックが夢うつつの頭を上げると、

銀の大浪が窓ガラスを堰めて、

ベッドに流れこんだ。

そこでしばらく、顔を見合せていた——

ディックと眞面目なお月さまと——

お月さまがしずしずと昇つて行くまで。

やがてお月さまは消えて、行つてしまつた。

この二篇も、同じ詩集に収められている。いずれも平明な
様式ではあるが、限らない子供の美しさがとらえられてい
る。

やさしくあれ、ああ、子供の手よ。

眞實であれ、星月夜の暗がりの中の

ほのかな海のように、

私に注がれているお前の眼は。

これは千九百十二年に發表された「聞き手」と題する詩集に收められた「夏」の最初の一節である。彼の子供への關心は、詩人の多くがそうであるように、自らの少年の日を通して、いつも用意された。束の間に消え去る幸福の夏を、少しでも永く持續させるために、自からの人生を通して、一心に呼びかけるのである。ともすれば怠惰になり勝ちな人間の心を説いて、正しいものを、子供たちのために祈念する。人間本然の姿を、なにもものにも増して切實にかもとうとする詩人の、あまりにも當然な道と言えるであろう。子供への關心は詩人にとつても、これ以上のものはないにちがいない。

古典から現代へ、子供の世界に焦點をおく藝術の境は、いかに新しい様式をかりるとしても、歸するところは、善なるものへの完成を眼ざす親心の表現を出ないであろう。

デ・ラ・メア氏は、今日七十五歳で、なお健在と傳えられる。子供の姿を私たちに親しませてくれる現代詩人の一人として、私がこの粗末な一文に引用した非禮をはるかにお詫びして、この稿を終る。數號にわたる御愛讀を感謝します。

子どもの心は、理論だけでは理解しつくされないとある。殊に、それを生き／＼とした動きのままに表現することは、文學や美術の力によらなければできないといつていい。昔から兒童研究の方法として、科學的方法とならべて、文學的方法がすゝめられている所以である。しかも、文學的美術的となると、平凡の力であつて、どうしても、すぐれた作家の深い濃やかな觀察と、すぐれた言葉と秀でた手腕とに待たなければならぬ。小説でも詩歌でも、繪畫でも彫刻でもそうである。保育者は常に幼兒の生き生活に直接に觸れて單なる研究者のもてない感觸と會得との機會に恵まれているのであるが、保育の忙しさに追われて、そうした味わいを味わっている眼を失することもある。文學を繙き、藝術の前に立つて、活をいられる必要の處々ある譯である。

松原至大氏の「英詩に見る子供の姿」は、こうした意味において、われらをして、子どもというものを、如何にこまかく見かえらせたことか。巧妙な譯詞と周到な解説との七回に亘る長い御執筆に對して、更めてお禮を申述べる。